「出エジプト」

──出エジプト記第14章10～14節──

（『旧約知識』第43号より転載）

１９４１年４月

小池辰雄

**試訳**

　10斯くてパロはった。時にイスラエルの子らがそのを挙げてみると、視よエジプト人が彼らのに寄せて来る！　すなわち、彼らはだれた。そこでイスラエルの子らはヤーウェーにわった。　11そして彼らはモーセに告げた、「エジプトにはがありようはすがないというので、汝は我らをれ出だし、此の曠野で死なせようとするのか。何でこんなことを汝は我らにするのか、エジプトから我らを導き出してまでも！　12これこそ我らが汝にエジプトで告げて、我らをって置いてエジプト人に我らをして仕えさせてくれとと話した事ではないか。なぜなら我らにとってはエジプト人に仕える方がこんな曠野で死ぬよりましなのだから」。　13そこでモーセは民に曰った、「汝ら懼れてはならない、っかり立て！　そして観よ、ヤーウェーが今日汝らのためになし給わん救を！　本当に今日汝らが見たエジプト人を、彼らを見ることをた重ねるようなことは永久にないのである。　14ヤーウェーが汝らのために自ら戦い給うであろう。汝らは静かにして居れ！」

**解説**

ここに掲げた数節は、10cEの外すべてJ系の史料による記事であるとされている。出エジプトの事件に開し、大体に於てJ史料〔Jahwistヤハウィスト資料の略、前 950 年頃にユダ王国で書かれた〕とされる部分は最も史実への近似性を、E〔Elohistエロヒスト資料の略、前 850 年頃に北イスラエル王国で書かれた〕はそれへの指標を示しているものと見ることが出来よう。さて併し我々はこの数節を中心として何を学ぶべきであろうか。イスラエル民族の出エジプトという伝説的な雲をた史的事実のの中でこの場面はどんな意味を有つものであろうか。斯く設問するとき、最早我々は単に史実への近似或は指標という見地からではなく、そこにあらわれている神的現実性に着目することとなる。

まず事の始めから、今我々が問題とすべき点と連関ありと思わるる契機をたずねつつ、主題に迫ろうと思う。

モーセはホレブ山上で啓示に遭った時（前号所載）、おのれの無力を告白し、その任に耐えずと辞退した（3･11､4･10,13E）。併し神はモーセに勝ち、之をえ給うた（3･12､4･11,12，15,16E）。もエレミヤが神に打ち勝たれて、完全に神のとされた如く（エレ20･7）。併しパロ説服の如何に困難なるか、その手段方途が如何に失敗に帰するかを、彼は神に示されている（4･21J）。モーセは謂わば希望なき抗争を神にゆだねられたようなものである。事実パロは幾度となくその心を「」にしたのである。一方イスラエルの民もモーセから奇蹟を見せられなければ信ずることの出来ない民であった（4･30,31J）。 而もその信頼たるや浅く果敢なきものであった（5･21 E）。

一方パロのイスラエルの子らに対する酷使はパロのモーセヘの反感と共に増大しつつあった（5･6～19J）。パロはモーセを容れず、民はモーセにつぶやく。モーセも人である。彼は神に訴えた、

「わが主よ、などて此民を悪しくし給うや、何のために我を遣わし給いしや」（5･22～23J）

モーセの苦衷想うべし。ら洗礼のヨハネが、

「るべき者は汝なるか、或は他に待つべきか」（ルカ7･19）

と、おのが弟子らをしてイエスにたずねしめた心境に似る。之に対して神は「今」「力ある手」がパロに降って、民をこの国から救い出だすのだ（6･1J）と確言し給うている。併し神のこの「今」は待たれねばならなかった。「力ある手」はなかなか現われない。併しここに神の「今」と「力」に終末的性格があることを見してはならない。

併しかの幾度かの奇蹟によって神はパロの心を打ち、「わが民」（3･7J）をエジプト人より「別つ」（8･23J）べき機を待ち給うた。遂に「」の機は熟した。「わが民」として顧みられし彼らは今や現に「わが民」として選び別たれようとする。之は全く神の恩恵の意志によることである。出エジプトは実に「き民」（32･9E）を引き出ださんとの恩恵的意志に基づくものであった。そこには何らかの贖罪的経過を必要とした。「」の意味するところは即ち之である。恩恵は聖別を生み、聖別は審判を伴い、審判は贖罪をめ、贖罪は恩恵に拠る。はかなる事実であった。神の審判は之を傍観するをゆるされなかった（12･22J）。而もその審判は「夜半に」突如として降った（12･29J）｡審判の終末的性格が遺憾なく現われたのである。「いれぬパン」こそ斯かる審判時にふさわしき食物であった。「」や「酵いれぬパン」の出来事を此の如き神的現実と見ようとするのと（J）、「節」や「除酵祭」そのものの根拠づけとしようとする立揚（P）〔Priesterschrift祭司資料の略、前 550 年頃のバビロン捕囚以降に書かれた〕との間にはか次元の相違はあるが、これは実に贖罪と聖別の啓示的事実であり、神の歴史の現実である。

神のかかるの意志と啓示的事実とが動因及び根本契機となって、モーセは、ヨセフの骨を携え民を率いてゴセンの地を発足したのである（13･18～19E）。神は彼をして道を曠野にとらしめ、導くに「昼は雲の柱、夜は火の柱」を以てし給うた（13･21～22J）。雲や火はヤーウェーの臨在の随伴現象として々現われる。やがてこの出エジプトは前方に所謂「の海」を控え、後方にパロの軍勢を見るの窮地に陥った。

イスラヱルの子らはこの窮地に立って何を感じ何を思ったか。彼らは実にを感じ死を思った（14･10～11）。民は神を仰がず（14･10cEはその後の数節に対して矛盾する、然らざれば全くえた者の空叫びであると見るべきであろう）、導者を信ぜす、現状を呪い導者を問責弾劾し、自らの低俗不信の心を曝露した（14･11～12）。曠野の死よりもの生をれる彼らの告白の中に、我々は人間の弱さ惨めさそのもの、人間の原罪的喪失性をまざまざと見る。人間モーセはその人間性を神に一度び殺され、神の口、神の腕となってはいたが、否それ故にこそ、民のとのよく解る導者であった。即ち厳然たる態度の中に深き憐みを秘めて言った、

「汝られてはならない、っかり立て！」（14･13a）

然り、彼モーセ自身がホレブの啓示に於て神から同様のめを受けたのであった。聖書そのものに於て、また信仰の歴史に於て、幾度び斯かる言を以て人は警告されて来たか、今現にそうであるか。而も斯く警める言の背後に偉大な力と救とが備えられているのである。神の命令や警告には常にその中に責任と力とが現在しているのである。人の側には信じて従うことだけが残されているのだ。寸毫の力も之に自ら加えるを要しない。而もその救はモーセの言う如く「今日」直ちにである。最も苦しき処に神の救は最も近い。救の終末的性格がこの「今日」に白熱している。

「よ、ヤーウェーが今日汝らのためになし給わん救を！」（14･13b）

この一句に出エジプトの信仰的現実は極まった。モーセ独りこの信と共に勝っていた。眼のあたりの如きエジプト軍は「今日」神にされてしまうというのである。

「神自ら汝のために戦い給わん」

復讐は神の力と秩序の中に在り。「捨身の信頼」に勝利あり。

「汝らは静かにして居れ！」（14･14b）

と告げたモーセ自身、死線を乗り越えていたのである！　生死を克服した生、勝敗を超克した勝がそこにあった。モーセのこの信とイスラエルの子らの恐怖との間には、今より越ゆべき蘆の海よりも深き淵が横たわっていた。モーセはその信に於て民のてのを引き受けた、神の力と神の責任にゆだねまつりて！　おのれを全く十字架にけて！　い　かなる場合にも神の救は「今日」ある。然り「今」ある。この信が白熱していないところに「待つ」こと「静かにして居る」こと「信頼」はない。かかる逆理的一致にのみ、救の終末性と信仰の終末性がある。

出エジプトはホレブ山上の啓示の実現であり、徹頭徹尾恩恵の力であり、人間モーセの信頼の勝利であった。イスラエルの子らは神の現実に於て決して出エジプトをしたのではなかった。ただ神の僕モーセ一人に於て、一人の故に、神の歴史は確実に出エジプトを果たした。外的には桎梏の、内的にはき民イスラエルは此の如く神に愛せられた。